

個人の生活 (その4) < 寺田縄 Nmさん >

金田地区の戦後の諸改革

戦後、金田を二分する事態が発生したことがある。村長選に絡み、結果的には僅差で決着したが、候補者の支持について、村内の諸団体も二つに割れてしまった。年寄りの手を引き、病人が布団に入ったままリヤカーで投票所に運ばれるほど、一票が欲しい激烈な選挙戦だった。当時のしこりは、今はない。

戦後、頭脳を持った人達が戦地から帰還し、地区のリーダーになった人もいる。戦後の改革もこれらの人達に寄与するところが大きい。地区には、「昔はこうだった」というような回顧的な人達も少なく、反対の為に「むしろ旗を立てる」ような人達もなく協力的に事が進んだ。

新生活運動は経済更正活動の一つとして実施され、冠婚葬祭の自粛も進められた。背景としては、金田地区は農村地帯なので現金収入に乏しく、生活に困ることも多々あった。控えめにやる事は、基本的には良いことだった。

しかし、参列する人達が、金田地区だけではなく、他からもよばれ、金田は自粛しているとも言えず、付き合いをして行くには無理があり、時には、「借金をしてでも」ということになったりして、竜頭蛇尾に終わってしまったようだ。

日常生活は貧しく、その時に飲み食いしようとする人がたくさんいた。あまりにも多く飲み食いし、屋外で寝てしまう人たちもいた。ようするに、「食いだめ、飲みだめ」の機会だったようだ。日常生活の貧しさの証明だった。小作人の生活は今のホームレスよりひどかった。

かまどの改善も補助金をもらい実施された。これまでは、かまどからの煙が家中に漂ったが、煙突をつけることにより煙が無くなり、家の中がきれいになった。火力も強かった。

粃殻を燃やす「ぬかべっつい」は、煙無く、火力も強く熱効率が良かった。強い火力で鋳物の煙突が傷むこともあった。残り火で火災になったこともある。

火力としては、粃、藁をフルに使った生活だった。燃やす木は少なく、屋敷林の枝木を利用し、秋繭に使った桑の枝を押し切りで断ち、もちを焼く、ご飯を炊くなどの燃料とした。

燃し木に使うために防風林・屋敷林を構えた家もあった。ケヤキやモチの木が植えられた。燃料にした家もある。

わら屋根は十年程度経つと風化し淵が欠けてしまうが、その傷みを抑える工夫がされた。

健民館の建設は、小学校に体育館がなかったので、それに代わる施設として設置した。

バレーボールへの取り組みは、農民病といえる、腰の曲がった農民の体位改善の方策のひとつとして進められた。取り組みの当初は良かったが、その後、暇や、余暇が少なくなり、また、健康の面では医者も増え、体位改善のスポーツとして持続しなかった。

継続は出来なかったが、この様な取り組みと活動によって、金田地区内の相互の交わりがよくなった。

他にも、青年団の活動、四Hクラブの活動などがあったが、地区内では農家が減少し、勤め人が多くなり、組織活動が難しくなった。

土地改良区の事業

飯島の堰（金目川堰）が事業の対象であり、堤防のコンクリートの下には「やいた」を川幅に埋め、金目川の伏流水を活用する。これにより、毎年の水が確実に確保できる。

工事には、地元の人達が動員され、賃金はなく全くの勤労奉仕だった。「でぶそく」で実施されるという重要な作業だった。

初めの計画では、もっと上流の片岡に建設される計画だったが、上流ではこれ以上の水が必要でもないということで、今の場所に落ち着いた。

堰の建設以来、上流との水をめぐる対立もなく、平塚市の行政上の関与もあり、金目川の水が灌漑用水として恒常的活用されている。

東海道新幹線の開通

用地は、昭和12年に「弾丸道路」として相模川から酒匂川の間を国が買収を終えていた。土地収用法での執行だった。この計画道路を新幹線として利用したので、地域としては何の抵抗もなかった。

補償は「ただ」同然で提供した。新幹線用地としての保証金でテレビを買っておわり。移転農家は六軒ほどだったが、移転料は各戸2千円と聞いていた。

開通後、時には震度3ほどの振動に悩まされるが、改善は進まない。高架が出来ているが、昭和13年の水害経験を持つ身には、水の逃げ道に思われる。

農業総合試験所開所

農業関係施設を建設するので、寺田縄の農家は一反ずつ提供することで進められた。補償は、一反で40坪の平屋が出来るほどの破格だったと思う。今では柱一本買えるかな？

建設地が入野の川向こうとの予定もあったようだが・・・

移転先の試験所は、台地上のため水に乏しく、雨水を活用する見込みだったようだが、困難のようだ。

温室内で落花生の天日干し。ヒバリが跨ぐような里芋では、農業の試験には不十分である。

養 蚕

養蚕は農家には現金収入源として有効だったが、「ねずっこ」で作業せねばならず、手間がかかった。養蚕の全盛期には、一回の売り上げで百円ぐらいになり、農家には相当な現金収入になった。当時の百円は小学校の校長の給料に相当していたか。米の価格は一俵、二十円程度だったと思う。戦前は、二千円貯めれば利息で食べていけた。

金田地区の畑地のほとんどが桑畑として利用されていた。養蚕は春、夏、秋の三回行われた。春と夏は桑の葉を、秋には枝ごと採り燃料にも利用した。

桑の古木は幹が太くなり植え替えの時にはたいそう苦勞した。江戸時代の末には桑の栽培禁止令が出されたこともあったようだ。百姓が金を持ってはならないとする政治手法だったのか。

農家の生活

戦前の農家の生活は、「筆舌に尽くしがたし」との表現がぴったりする。暗渠排水が完成するまでの水田は、文字通りの「どぶ田」であり、牛や馬という畜力が使えず、人力のみだった。農作業には「マンガ」を使い、朝四時起きでも、一日に一反ほど耕せば上等だった。

馬は餌に穀物を必要としたので、持てる家が限られていた。寺田縄には他の地区より多く飼われていた。牛は、赤褐色で小型の朝鮮牛が飼われた。オス牛は云うことを聞かなかったが、メス牛はおとなしく、農家の女性でも使いこなせた。男手の少なかった戦時中、活用された。

食事は、米と麦の比率が「内三割、外三割」といわれ、白米だけのご飯は食べられなかった。麦が多ければ、握ってもバラバラになり、お握りができない。麦飯は「ふんどし」とか「下駄のご飯」と言われたものだった。米は売るためのもので、自家消費には僅かしか残せなかった。学校に昼の弁当を持てず、昼休みに家に帰り、食事をして学校

に戻るのが日課だった。今では、「麦とろ飯」は高価になっているのは皮肉だ。うまい物を食べてかかる糖尿病を患う人はいなかった。

暗渠が完成する前、稲作が終わり、農閑期になると「日おとり」（日雇い労働）に出る人が多かった。そういう生活が強いられても、寺田縄では俳句をたしなむ人たちがいた。日枝神社内に明治時代の額があり、俳句が記されている。戦後も句会などが行われていたようだ。

縁台将棋はやる人が少なく、碁打ちは流行っていた。雨の時の遊びの一つだったのだろう。

入野には大農家もあり生活が安定していたが、寺田縄には土地を持たない水呑み百姓が多かった。そのためか、入野では、寄り合いの座席はほぼ決まっていた、どことなく上下の差がきちんと守られていたようだ。寺田縄ではそのような事はなかったと思われる。入野とは川一つの隔たりだけなのに、その違いの起こりはどこにあったのか？その所以は分からない。寺田縄では貧乏人でも、収入の安定を求め、勤め人になることを進める家が多かった。

戦前、「あの家が学校に上げた、とんでもないことだ」と、よく地主が口にしていた。百姓に教育を受けさせると、いろいろなことを言い出し、地主批判に走ることは必定との考えがあった。今では考えられないが、この金田地区にも封建的な思想が残されていた時もあった。戦後の「農地改革」は、地主層には支持されずとも農村が変わるきっかけになった。

水呑百姓は娯楽がなかったので、「ばくち」に手を出すものがいた。水呑ならずとも地主から借金をし、暮れの返済には返せない。複利計算ができないので返済額がかさみ、田畑を取られた農家もある。返す見込みのない金を借りて、働かず、日向ぼっこにタバコでは・・・。

昔はああだ、こうだと昔を引き合いに出すのは、そういう人が力のない現われだ。こんな暮らしが、人身を疲弊させた。趣味を持たない人間はだめだと、つくづく思う。

< 以 上 >